

鵜の真似

著者	鵜殿，新一
雑誌名	龍南
巻	2 1 0
ページ	6 7 - 7 9
発行年	1929-07-01
その他の言語のタイトル	鵜の真似
URL	http://hdl.handle.net/2298/6888

鵜の眞似

鵜殿新一

轉換期にある文學

龍南に原稿の集らぬのに僕等は、默殺された苦汁を舌端に弄びながら、更に教室の黑板に樂書される、民政黨、選舉、田中義一等等の雄渾な筆致を描き出しながら、文學に就いての考察を餘儀なくされた。

近來急激に其の度を強めつゝある大學の入學難更に就職難。高校と大學の、課程其物が是等兩者に最も實利的なる見地より立てられた業の學校當局の經營法と巧妙從順を極めたアダツプテイションに依る就學法とは現在の狀況から見て、自然の現象であらねばならぬと思ふ。廣い意味に於ける社會の表面に現れた現象としても如何に人口過剰失業更にスピード露出征等々の傾向が學生生活にも反映して居る事かゝを痛感せしめられる。なを吾々學生は無駄なものを排斥し過る無駄な物と斷定し過る、更に亦無駄なものを發見し過るが故に、枯瘠した吾々の精神は疲勞し過た吾々の肉體は強烈なる單的なる刺激を求め益々露出征の患者（健全なる露出もあり得るが故に没落せんとする傾向にある症狀として）をして近視眼的に狂奔せしめられるのであらふ。斯る時代に於て所謂舊來の藝術が其の精神がどれだけの力を吾々に與へ得るであらふか？

然し一步退て考へる時亦僕一個としても現在發表され、論議されつゝある文學作品や殊に小説に於て、僕自身の興味を留めるには余り退屈であるのを見出す。益々、短篇の短篇、掌篇小説の流行、コントと共に岡田三郎氏の復活等更に詩の傾向にも於て短詩の流行・シュウル、リアリズム俳諧詩米國に於る俳句研究等々に現れた直接簡明への傾向を見る時又一方に於て前者と相對して起つた大衆文學其の中に於ても、探偵小説の流行を見る時吾々は、是處に純粹藝術に對して再吟味をすべく余儀なくされて

居るのではあるまいかと思ふ。

確に文字に依る藝術 (Literary Literature) は轉換期に直面しつゝあると思ふ、若し舊体の全き延長に過ぎざるものとすれば純文學作品は、確に明治大正文學全集で、結算された彼の既成作家其人の沈滞沈落と其の軌を一にするであらふ。

時代は移りつゝある、若し過去に於て文學思潮の變遷を其のカンバスに投する色彩の變化であつたとすれば現在動きつゝある傾向は寧ろ色彩を去れた構圖其物である、前者を二次元的表現だとすれば將來せんとする傾向は三次的表現でセザンヌを轉期として廻轉し初めた、彼の繪畫に於て新天地の創造に在るだらふ。

平面なる單彩なる、過去の身邊小説は實に退屈すぎる事ではないか！ 其れに代るものは何か？

たとへその曙光が未だバアギユな可成未完成なラフものとしても其の生動せる、新樂の傾向を知る事が出来る。即ちプロレタリア文學と映畫とに其の内容と手法とを強く暗示されるのである、今是の二つの問題に入る前に過去の文學の意義に就て簡單に吟味をして見よふ。

○自然主義文學とアンチナチュラリズム

自然主義文學こそ、初めて、時代的な根本的な洗禮を吾文學に與へたものは始どないであらふ、過去明治大正の文學の潮流を大體に於て、自然主義前と、自然主義及び反自然主義で分割して見るとしても差當り間違はない。

自然主義前の文學は、たとひ紅露の絢爛ありと雖も是を其の表現手法に於て、其の主題に於て、其の態度に於て、徳川封建政治下に發展した其の遺風を、忠實に固守してゐた。

佛教思想の流布と其時代性に依つて著しく作用を受た、藝道に對する見解及び其の態度も單なる自己其物が生活から遊離し、逃避して社會と關係なき完成へと目指して居た。完全に一つの遊びであり心慰る爲の手段に過なかつた、芭蕉の藝道三昧の境も遂に文學は風流事たるに止てゐたのである。更に明治に於る紅葉露伴に導れつゝあつた其の文學も、風流と、精進に一途猛進し

生活其物の、意向は副次的なるものに止つた。

彼等は彼等の視野を出来るだけ狭め、自己の境地を人爲的にも自己其物への純粹さを、高めんとしては益々、風流題目を吟しながら更に隔離された、自己の境地を作らん事に、七生の誓も取て辭せなつたのである、(一)

斯くの如き固定と傳統と強られたる均衡を生命とした文學に久しくとち込められた社會は、新しい田山花袋氏に依り先づ着目させられた西洋文明を奔騰する潮の如き自由な潑刺なる、生活への傳統破壊への文學思潮なる自然主義が迎へられたのは、明な事であらふ。強られざる自由な人間性の本源に歸つて社會を否認する人間の生活を見んとする、眞摯な誠は、芭蕉紅露の精進に敢てゆずらざる態度で社會の暗黒面へ、曲げられざる人間性の全てを、否認する時代の其反動としての一面を、より一層強調して、突入せんとしたのである、彼等に於ては、社會と傳統に依り、惡なりと烙印されたものを、更に新しく見直さんとし、其處に新しき意義を發見せんとした、自然主義の一群は教える事より知る事を、知る事より更に感ずる事に文學の生命を躍動させんとしたのである。(二)

故に彼等一派は、只管社會の如何なる方面にも更に反動的意味に於て過去に看過された暗黒面に、余りにも能動的に飛出し、街頭に具体なる眞理を求めて、餓犬の如く彷徨し、突入し、喰ひ入て行つたのである。

名作とされてる蒲團にしても田舎教師にしても又は、色彩を少し異にした藤村の破戒にしても、舊來、嘲棄して顧みられなかつた、而もそれは余りにも明なる事實であり且絶對的に大多數の生活及び意識の一面を、曝露して行つた。

過去に於て、思想善導主義の下に於る勸善懲惡の固定し、覆れ利用された指導の下に盲從せる社會人に對する假借する事なき事實曝露は、生々しき其の筆致と共に時代人の夢を覺醒してゆき遂に一時代を覆ふに至つたのである。而も是の風潮は、閑に沈湮し、時を喰ふに更に金と手段を選ばざる者に依て支持されたるにあらずして實に、其の自然主義作家の對象とし描出された寧ろ下層階級に依り、迎へられ支持されたと言へる。自然主義は社會の顧みられざる、暗黒な不當な一隅に於る新しき正義と、眞理の地下よりの發芽であり成長であつた。

更に反動的意味に於る前述の出發點が民衆に迎へられた原因なると共に看過すべからざる一事實がある。

それは日本民族性(?)である。萩原氏の「詩の原理」に於ても明言されてるが如く實に日本人は世界に於ても稀に見る散文的性格の所有者である事であらふ。傳來した彼の音律的な漢音も是を打碎いて平垣なる、發音表標として受け入れた又受け入れざるを得なくなつてゐた様に無音律的言語であつたのであらふ敢て語數に依り既に音律的になかすかな効果を民謡短歌俳句に於て求めざるを得ないのである。又一方日本民族固有の宗教に於ても、或は爾今千餘年の文學作品に就ても、浪漫的色彩の作を求めるに、苦心する程に、吾々は、現實的な直裁簡明なる作品を見るのである。

斯く吾國民性として認ても大した誤はないと思れる現實性と散文性(是は又二にして一なるものであるが)が常に文學の色調を特色附る一大要素である、故に彼の自然主義の現實曝露と寫事平板なる表現とは餘りにも吾が國民性に投じたものであつた。

前述の所に依れば自然主義は、終る事を知ぬ文學思想上に於る万世一系の思潮であらねばならぬ、然るに何故に自然主義文學の終焉を見たのか歟?

是の點は的確に認識しなければならない。何故かなれば吾が國民性に本質的な一致點を見出し得る點に於て更に新興プロレタリア文學の正に取らんとする傾向と對比する點に於て所謂眞に自然主義の終焉は何か?

先づ想ふに自然主義文學は個人主義に否曲された。其の出發點に於ては或は藤村の破戒にも其の片鱗を窺ひ得るが如く、社會其物の苛借する所なき自由な批判と、個性の拘束されざる主張とは舊思潮及び傳統破壞の點に於て一致して居た、然し、それは文學論としての一の外形に過ぎなかつたし一の文學上の手法と擇ばなかつた。寧ろ其の外形的手法に於てのみ第一義的活動を爲したのである、

彼等には突入すべき意向そのもの、自然主義的信念を明確にして居なかつたのである、積極的な建設への主張を持す或は前時代までの、文學思潮に對する、盲動として其の重點を見出しもし、置きもしたのであつた。

文學に於る封建制度及び其の思想への反動として全的な意味を持て居たものとも働し得るであらふ。

其の故にこそ田山、島崎、國木田氏等のそれは兎も角としても其の主張に雷同せし、亞流の外形上の模倣の文學の徒をして遂に、實驗文學論は無意識無目的なる制節なき生活の放縱と獸性の奔出は現在に至るまで文學の徒或は文學青年の語をして思想なき學究心なき本能のまゝなる現實性なき更に生活破産者なる語のシノニムとして流用され、社會人の嘲笑する所となつたのである。

吾人は、改めて斯る意味に於ける文學青年たるを恥じ且是を嘲棄する、

自然主義文學は實に、其の無理想と完全なる個人主義に立ちしため遂に破産してしまつたのである、本然の姿に於る自然主義其物には無理想は許され得ない。或意向の下に立てこそ初て現實其物を拾捨好惡する事なし、大膽直截たる描寫する事に意義を見出し得るのである。

想ふに現在の社會を全的に肯定し得るものがあり得るだらうか？正義の名の下に於て社會其物の構成に於て殆ど否定する物を見出し得ぬものがあり得るだらうか？、吾人は故にプロレタリア文學に自然主義の取りし外形を取るであらう事にのみ其の効果を期待し得るのである。

自然主義文學は、明治中葉に端を發し明治後期大正更に昭和の現在に至るまで其物の餘炎を持ち續け更にプロレタリア文學として新裝せる形態で爆發した。是の一貫せる、傾向と對立せる爾餘の文學思潮をアンチ・ナチュラリズムの語で總括して、是處に簡單に解剖して、更に到來すべき文學の傾向を僅にも指示し得るものを把攔せんと思ふ。

押しつまつた生命と生命の、實は思想意向を持たない肉と肉との語が近き歟、白熱せる、境地こそ自然主義の法悅の境とした強烈なる火酒に沈湎せるが如き其の心境に對し、反對したのが漱石を先導とする、ホトトギス一派更に餘裕派の一群であつた。飲料は火酒に限らず水も亦快適なるものゝ一なりとて、水の如き淡如の境を教へ「：意地を通せば窮屈だ兎角人の世は住みにくい住みにくさが嵩じると安い所に引き込したくなる云々」の語をはきながら漱石は陶然と花霞に煙る仙境にと敢て取濟した智者の格好よろしく、裕々として風流を求めて下界から雲かくれをした。

其は表現の手法に於て、精神に於て、俳句道の小説への輸入精製に外ならなかつたのである、俳句其物の境地を、又十七字を

苦吟する人の生活と、環境とを考て見よ。

文學は、時代の直接反映であり、更に經濟現象の間接表出であり其の上部構造である。文學は常に、時代其物の第一義的代辨であり指標であり更に指示者であらねばならぬ。斯る意味に於てのみ文學の積極物なる一面を主張し得、其の存在に價値あらしめるものであり文學が遊びの文學に終る時既に文學は、其の生命の一半を寧ろ根本的な意義を喪失するに至るのであらふ。

文學に依り、閑をつぶし更に、疲勞を慰さんとする場合には、又それを目指して、文學者が歩く時は、既に吾々は、是の文學を社會の主要なる現象としての云々を論議する勞を敢て捨ねばならない。

さればこそ、偉大なる漱石は、教授の榮職を、抛ち更に、『三四郎』それから『門』へと至る、これ社會生活其物へと突入を試み『行人』『心』等に於ては全く、血まみれの、誠鍊敢て爲して居るのである。然し遂に漱石は、俳人漱石學園の漱石の本領を失なかつた初期に於ける『坊ちゃん』『猫』の環境と後期の漱石の心境とを混和し得べくばと或は思ふも遂に漱石も時代の人に終つたのであらふ。

意地と知と、情との地上の雜事に煩され彼は天に則するの道を知り私を去り私に新につくの道を知つた。然し思ふに文學の分野として或は根本的なものとして、文學は私を去り私に歸るの道を教へる事も認め得るが問題は現今の社會に吾人は直面し、如何に社會を新しく見直し如何に社會の一員として、意向ある行動に就かんとするかに當り、新しき將來すべき文學の問題を云々するに當ては、僕は、私を去り私に就ての問題より更に、社會の一員としての、云々の問題こそより必須のものであり更に社會機構其物への、確乎たる認識こそ、現在に於る必須の問題であらねばならぬと思ふ「私」「個」より更に取扱ふべき焦眉の事實が存在しないものだからふか？是の事實に就て吾人は眼を弊ひ得るだらふか。

文學は、消極的な、慰めの、安らひの、境地のみであるべき歟！

更に自然主義の文學に對抗して起つたものに白樺一派の理想主義謂ふ人道主義がある。

是は言ふまでもなく前者の誤れ 無理想を標榜せるがため更に曲解された自然主義的傾向に對し斷然たる、理想即ち人道の、鮮

明なるトルストイの旗を振りかざし、社會改造然しそは單なる、信するか信じないかの拘も、信仰問題にも等しい心的現象を主眼とせる則精神改造の理想を天下に叱呼したのである、特に彼の瘡瘡でも華族たりし武者小路氏の、訥々たる、雄辯に依て天下の青年婦女子を魅し去つたのである、恰も太陽の出現し初めたが如く天下の視聽が集り禮迎された。然し太陽は登るべき所から登つたと言える、則ち雲の上から。

彼等の言ふ「愛」「人道」「人間」なるものは、唯彼等の言ふ所にのみ傾聽し是を信する所に初めて發現し得るものにして若し現實其物の、多面性に對する、客觀的見解を附するに至れば實に抽象的な不可解な言葉であつた。唯信じる場合にのみ唯現實的認識を伴ひ來るが如く見へるものであり、問題の解決は不感症に在り、是に目を弊ふ事にあつた。拘も一つの天來の信仰に關するが如く、彼等理想主義一派の群は漸次地上から遊離してゆき、其の出發點に還元してしまつた而も是は必然であらねばならぬだらふ、意識を決定するものは還境にありとの言を借用するまでもなく、武者小路倉田氏等の根本意識は要するにブルジョア意識に依る自尊性と、架空的な布施愛への憧憬にあつたのである。不屈なる自己主張と、愚鈍なる理智とは、幸にも自己批判に於て良心の麻痺は妄想の境と、敢て撰ぶ事なきまでも彼等の意識を煽つたのであつた。然し目を弊ひ得る者は問ずも、吾等は現實其物から現實に働く自己及び社會から強て目を開かされ、地上の具体其物の生活へと追ひ出され、更に問題を提出されるのである。新しく生じた決定的な生活の問題を解くに當り其の教ゆる所に就んとするも、既に彼等の言は天空に遊離した、一の空言と爲り終つたものである。

武者小路氏を其の代表せるものと總括して其の主張が文學に與へた二つの著しい點を見過す譯にはゆかない、即ち一は其の表現上に於て自由大膽なる、描寫である、直接簡單に、意識に表れた思想感情の明白的確な表現であり口語表現中の更に口語使用がそれである。是の點は文學的に「表現法」の時代的變化と時代性を批判してゆく場合大きい問題と適例を與へてくれるであらふ。

他は主觀強調の點である。結局彼等の、意識が余りにも現實を無視せる自己肯定から出發した故に、遂に獨善的な觀念の世

界に（一見する所觀念的ならざるが如きも其の本質に於ては觀念的境地に没入したものと云へる、是の事は何れ機會を擲へて、論ずる事にしたい。）這入つてしまつた。現代思潮の特長として確に主觀強調ではある。が人道主義のそれも其の一つの先驅的現象と見得る。

現實的なる、實証的なる、ものを求めて止まぬ現代人に取ては人道主義の存在に既に幾何もならずして、刺激即ち時代性を失つてしまつたのである。

白樺派と共に聯想されるものに有島武郎氏が特異な光茫を散て居る。大正の文壇に於て其の聰明さと眞摯さに於て更に其の終焉に於て軌を殆ど一にした二つの大なる存在として有島武郎氏があり芥川龍之介氏がある、何故に死に至つたか？、この問題の現代の意識に依る考察は、何物かを暗示し得はしまいか。

余りにも忙しい是の拙論で數行に於て取扱ふには又余り重大な問題であると思ふが然し、敢て犯すすれば、氏の自殺を氏の性格と環境の二重性に依るものと、考へる。氏自身の告白に依ても明なるが如く其の内面に二重の矛盾せる、ものを抱いて其の相剋に彼の思想行動生活意向全てが自らを自ら相制して動きの取れぬまま最后まで迫しつめたものである。

一は、氏自身の環境又教育である、其の特殊なる階級的地位が封建的教育と、更に基督教教的紳士道とに制約され強られた社會的外面性と、一は氏本來の、強烈なる情熱引いては敏感にして公明な理智に依り、導るべき情熱との全然相反せる、内面性との脊髄が氏自身の社會的地位の、向上と、更に時代の變化と、それに伴ふ氏の思想の變化に依りて、益々大にされ、唯物論の見解を採ればそれだけ、自身の姿を明確に否定してゆくに過ぎなかつた。農園の解放財産の放棄等も要するに有島氏自身の意識が最後に至るまで動すべからざる歪められたものである事の強識を認むる事にしかならなかつたのである。

歪められた人間から自由なる自然なる人間其の物に歸らんと試み、た努力も（或る女、石にひしかれた雜草、カインの末裔等）觀念的なる病的な人間の姿を肉と靈に對立さして、描いたに過ぎなかつた現實に歸らんとする程彼自身現實から離れた世界に到達し現實の人間其物に失望せざるを得なかつたのである、斯る純全なるインテリゲンチヤの良心的終局點は、其自身の否

定であり虚無の世界に外ならぬのではないか、僕は僕の立場から見ると是の虚無の世界を脱却するに残された唯一つの道があると思ふ、藝術から去り、より現實的な社會に身を投ずるの道が。

然し思ふに人間に其の本然の姿にそれより出發した社會の中に思想の推移も、其の出發點に於ると同様其の最後の目的寧ろ努力も藝術を對象としての事であり、全てを貫く藝術のグルンドを離れて其の推移が更に到達した藝術否定の、思想も、全く無意味の味である、寧ろ藝術否定其の事がより大なる藝術擁護のそれではないか。

藝術の野に於けるインテリゲンチヤとして吾々が現實の社會其物に、返らんとする時、吾々は如何に爲すべきか。有島氏は、自滅と壓へられた感情の最後の、爆發に依り或は彼の良心に、殉じたのであつた。然るに吾々は如何に爲すべきであるか？

其の一の現れとして藝術至上主義の立場がある、それは谷崎潤一郎、永井荷風、久保田万太郎、佐藤春夫、里見淳氏等も其の傾向に一括出來よふ。

元祖永井荷風氏に就て吾々は何を論じ何を學ぶべきか？ ボードレルの絢爛と佛人の樂天的享樂性、其儘に、彼自身の思想圈内に移植し自己を美其物に隷屬せしめ更に、俗を嘲り、現實を矛盾し、敢て自己のみの世界を作り、是の高雅なる賢人に何を學び得るか？

反自然主義の意味から出發した、藝術至上の、立場を歴史的の一事象としての意義を又は文辭の絢爛洗練さに於て吾々の語累を豊富にする點に於て、偉に其の存在を認識されるに止るであらふ。

將來すべき文學の傾向を中心として過去の作家を歴史的に見る場合に又斯る、無雜糅末なる小論に於て久保田万太郎氏は少くとも大河の一瀾曲部の一沼澤に過ぎぬ存在であらねばならぬ。江戸及び江戸人を問題とする限りに於ての實に熾き込めた江戸の味を傳へる、存在ではある。

唯美派悪魔派の谷崎潤一郎氏の存在は何を意味するか？思ふに自然主義に於ても既に萌芽を認め得る異常なる、少くとも在來の美意識に依れば變体的なる美の一方的誇張と自然主義其物の思想にては、表現に第一の對立なる華麗富潤なる、描寫と、是を

總括する構想の變化が思想なき彼の作に、大家の風貌を與へたのである。概念的なるテーマと構想と、其の表現は唯材料として近代科學を一滴混入する事に依り、正に明日の大衆文學の明確なる指針となり得るのであらふ。

谷崎氏の存在は、必然的に自然主義の、暗黒なる醜惡なる事實の描寫を聯想せしめると同時に。現在の大衆文學中の探偵小説の存在が亦吾々に社會の不合理と暗黒面を間接的に教へるのである。然し谷崎氏と共に現在の探偵小説家に思想及び理想なき事、何と意向なき事歟。

里見弴氏に於ては、有島氏の遂に達し得ざりし自由なる奔放なる人間性の現實的な描出は、在り得るとしても然もそれは個人としての人間のなる、苦惱であり、あがきであつた、更に一步理智的に社會を見る事に欠て、其の視野は亦狭小なるものであり其の人間解譯に於ても個々に相通する物を——まごころ、な、さ、けの彼主張に見るが如く浪漫的にして且又觀念的でもあつた。一つの正義を教へるものであつたが人間本來の姿を示しはしたが如何に是を、形作り、是を適用してゆくか其の意向を教へはしなかつたのである。個に出て個に終らんとする所に、更に其の表現に於て或は久保田氏と其の軌を一にするのではあるまいか？是等兩者の代表する文學は、文化の解体期にあり而も健全な裏面それは引ては人間性の奥深き所に潜在し亡びる事なき靜寂を求める心境の澄み切つた、藝術の世界であるが故に、斯る藝術は、錯雜し奔流する文化の主流から離れ、なを又是に則して一沫の靜麗なる色調を加へるものであり藝術の他の一面を傳承するものである、

特異なる存在として他に、佐藤春夫氏がある。此の藝術も前二者と同じく其のユニークな個性の把握に於て同様な立場を取るものではあるまいか？

特に佐藤氏の場合に於ては、其の本質が詩に在る點に於て、從て慧敏なる感受性と、直感とが常に流動してゆく新鮮味を有して居り是は常に論理的基礎から發した、爾餘の作家に比し社會其物の、息吹を、先づ感受し、社會に對する、見解に於て、嶄新なる、新境地を、展開するものである。是の點に於てこそ、斯る藝術に對して要望するもので例へば自然主義末期及び谷崎氏等の時代に於て其の不健全なる文學に對する一清涼劑として、彼の、田園の憂鬱に價值を認められるのである。

其後個人的煩雜な問題のため、傷いた十年間は低迷せる自慰的な作品に没頭したが最近作「のんしゃらん」等の作に現れた彼の心境は敏感なる、インテリゲンチアの、消極的な反抗と、逃避と、リリカルニヒリズムへの進出を示して居るものである。

佐藤氏に期待し得るものは何か？、吾がドクマ的な見解に依れば田園の憂鬱更に一夜の宿、又秋立つ等の作に見得る、田園の健全なる、精神からのリリースを削奪する事であらねばならぬだらふ。今田園の憂鬱から新しく出發せんとせば吾々は彼の低徊——個人及び社會の中間に於る動搖——から完全に脱却し主觀と熱情の對象を集團に、見出し、展開してゆかねばならぬ。然し佐藤春夫其の人に期待出來得るかは興味ある問題である。

試に氏の最近の力作「ボルトガル文」に對する、彼自身の感想として、「思想だとか理屈だとか言ふものは、時と共に變遷するものだけれど、人間のエモウシヨンの一番深い所は千古不滅のやうな氣がする」云々と述べて居る。一應は首肯し得る味深い言葉であらふ。然し思想や理屈等が時代に依り左右される様に、藝術の眞の對象である人間のエモウシヨンなるものそれ自体は千古不滅であるが要するに其のエモウシヨンを起す對象なるものは、各時代各階級に依り、同様に左右されるものである。戀愛の對象其物に對する、美の理想はプロレタリアートとプチブルと、農民とインテリゲントのそれは違てゐる事はルナヤルスキに依り證明されて居るのである。

誠に勞働者に迎へらるゝ、活動や、音樂と、インテリヂェンとのそれは異り少年に、青年に、老年に迎へらるゝそれとは又異なるものである。それは或る時代と或る階級に依り異なるべきものである。其の受る感動の可量的性質に於ては同様で勿論人間に覺感情があれば同一のものであらふが問題の、其の原因を作す對象の如何にあるので對象の解決如何にあるのである、佐藤氏に於ては是の認識の不足がなを彼をして藝術至上的臭味を脱し切れないうで居るのではあるまいか。

彼の性格の多面性と敏感さと、及び其の文才こそ、なを新しき存在として續き得るのであらふとされて居る。

藝術家としての必須的な、要素としては等しいものは千古不滅の法則であらふが吾々が問題とし注目するのは、其の要素が動きかけた對照の見方にこそ、ただ懸るものである。

直に是の法則に適應する、可能性の思ひに依り、其の、藝術的終局を示した例として、佐藤氏と同期の、菊池寛氏がある。久米芥川兩氏と新理智派の名稱で總括される、菊池氏の、進出は是を社會的時代見條件を求むれば次の如きものと見ても大した過誤はないであらふ。

科學の進歩に依る、時間の經濟化と、社會の昇進期に於る個人中心の自己の合理的肯定である、前者は、菊池氏の簡潔明快な表現と戯曲的手法に依る刺激性、及び芥川氏に於る、明快なる短篇が短時間に其の要領を與へる點に於て近代人の趣向に投じたものであり、更に現代人の、自己肯定と、主張に菊池氏の直截整然たる表現、芥川氏の都會人らしき洗練され盡した、理的推論と表現は、更に或點に於ける偶像破壊の點で一致し、積極的に現代人の心を掴み取ってしまったのである。要約すれば、社會に對する態度と、其の表現に於て全く現代的な條件を具備したものであつた。

然し菊池氏の、行詰りと、芥川氏の自殺は、何を意味するか？、何に由來するものであるか？

彼等は對象其物を、見失つてしまつたのだ。現代人の實に急速なる、思想の變化に應じる事が出来なかつたからである。

菊池氏に於ては、其の表現に對する倦怠と、無刺激は引ては彼の思想そのものに對する、不滿の表れでなくてはならぬ、何故かなれば社會の求むるものは既に個人主義的なる、偶像破壊より更に集團的なる、階級的なそれでありその批判にまで至てる。而るに、菊池氏自身の一面的な素質は、是を感受し適應してゆく事が不可能と爲つてしまつたのではあるまいか。

芥川氏に於ては、吾々の検討すべき暗示的な問題であり、漫然たる是短評にて斷定するのは死者に對して禮に適ふ所でもあるまいと思ふし更に困難なる問題なれば是を後日の評論にゆづるとしやふ、唯許さるべくば一の憶論として、氏の自殺の要因として、社會の急激なる、變化に、應ずるに氏の、活力（獸的生命力）が理智に伴ふ事が出来ず更に理智は、原始に、歸らんと努る程それ自身現實に、引もどすに過ず敢て死に依て、是を達せんとしたのであると思ふ。原始に歸らんとする、一努力が宗教に對する、死前の要求でもあつた然遂に彼には、信據するに單純無智でなさ過ぎたのだと思ふ。時代の漠然とした、不安を先感じ焦る程唯自滅の道をすべつて行つたのであらふ。

是の事は吾々の階級としての是の階級の支持してゆく藝術の重大なる問題となつて現れて來ねばならぬ。

昂進期に或る時代が在る場合は、一は他を全く壓し、殆ど統一体として見得る混和の状態に在る、斯る場合は、是の中間層は社會も最も健全なる、中心を爲すものであり、藝術に於ては、其の統一体に最も同化せる有辯なる代辯者であるが一度社會の解体期に向ふや、兩端にある階級は漸次分裂し其の間隙が大となるに伴ひ、吾々の立場は漸次浸食され削奪されてゆくのである。

崩れゆく自由主義と個人主義を、積極的に轉回せんとする試は有島氏と、芥川氏に依り其の情と知の兩方面に於いて行れたが其の結果は同一の點に落てしまつたのである。然らば如何に爲すべきかの問題が次に起る。

是處に於てプロレタリア文學と、新感覺派及び其の周圍、純粹文學と大衆文學、藝術運動と政治運動、映畫と文學、形式と内容論、等を検討して見ねばならない。是こそ重大なる當面せる問題であるが、相當の準備と熟慮を以て論及したいと思ふ。

×

×

龍南の原稿不足のため、思ひつくまま過去の文學を何の準備もなく、獨斷的に述て來た。恐らく一顧の價值なき事は自認しつつも委員として仕方ない事である。

世に時間に追はれなほ全く不向の原稿紙うづめ程苦しい事は少いだらふ。

唯願ふ所は懸賞號第二學期號に斷然自信を以て投稿して戴たいものである。又諸氏こそ自信を持てよふではないか!!